

在日ブラジル人児童と日本人児童の安全に関する調査研究

木宮 敬信¹⁾

1) 常葉学園大学造形学部

Surveillance Study on Safety between Brazilian Children in Japan and Japanese Children

Takanobu KIMIYA¹⁾

1) Tokoha Gakuen University Faculty of Arts and Design

要約

在日外国人の滞在年数の長期化・定住化が進む中で、児童に対する効果的な安全教育プログラムの必要性が高まってきている。しかし、在日外国人児童の安全に関する現状は、十分に把握されていないようである。そこで、検討のための基礎資料を得ることを目的として、ブラジル人学校児童の安全意識や知識、行動についての質問紙調査を行った。調査は、全国のブラジル教育省認可のブラジル人学校の中から8校を抽出し、平成22年7月～10月に実施した。調査結果を、日本人児童を対象とした同内容の調査結果と比較することにより、ブラジル人児童の安全に対する傾向を推測した。その結果、ブラジル人児童は、日本人児童に比べて、IT機器の利用が進んでいること、安全意識は高いものの日本で教えられている安全知識についての理解が不十分であること、防犯ブザーの配布といった教育施策が取られていないこと等が指摘された。学校や家庭の教育内容、自治体や警察の取り組み状況、児童の生活環境等、様々な要因が推測できるが、この結果から、日本人児童向けの教育内容を流用するだけでは不十分であることが明らかとなった。

キーワード：安全教育，ブラジル人学校，質問紙調査，

Abstract

As more foreign nationals are living in Japan for longer periods of time, with many settling down, there is a strong need to implement effective safety education programs for their children. Nevertheless, not much seems to be known about the safety of foreign-national children in Japan. In order to obtain basic data for analysis, we conducted a questionnaire-based survey about safety awareness, including knowledge and behavior of students at Brazilian schools in Japan. We selected eight schools out of the Brazilian Ministry of Education-certified schools across Japan, and conducted the survey between July and October 2010. By comparing the results with similar surveys targeted at Japanese children, we looked at safety trends among Brazilian students. As a result, we found that Brazilian children use IT devices more often and have a high level of safety awareness, but lack sufficient safety knowledge like what is taught at Japanese schools. It was pointed out that educational policies, such as the distribution of safety buzzers, were not implemented. There may be many reasons for this, such as inadequate safety education at school and home, lack of measures taken by local governments and the police, different living conditions, etc. Our survey results showed that simply applying safety programs targeted at Japanese children to Brazilian children are not sufficient.

Key Words : Safety education, Brazilian school, Questionnaire-based survey

I. はじめに

近年、インターネットの普及や科学技術の進歩、社会情勢の変化等に伴い、新しい形の犯罪が多発している。児童がこのような事件の被害者となることも少なくなく、犯罪から児童を守ることは、学校だけでなく社会全体の使命となりつつある。児童が安全に生活するためには、

環境整備や政策に加え、安全教育の充実が非常に重要であることは言うまでもない。しかし、安全教育、特に防犯についての教育は、未だ体系化されているとは言えず、多くの学校や家庭では、手探りでやっているのが現状である。こうした状況を踏まえ、効果的な安全教育プログラムを作成するための様々な取り組みが始まっており、児童の安全に対する意識や行動についての調査研究の結

果を踏まえた新たな提言もなされている^{1,2)}。特に、「地域安全マップ」に代表される、地域社会との連携プログラムの有効性については、児童の気づきを促し、実践的な能力を高めることができると評価されている³⁾。このように、児童に対する安全教育が徐々に整備されつつある中で、十分な検討がなされていないのが、在日外国人児童に対する教育である。在日外国人児童は、日本人と一緒に小学校に通っている児童や本国の教育課程で運営される在日外国人学校へ通う児童、その他、家庭の事情等で不就学となっている児童など様々である。こうした多様な児童に対して、効果的な安全教育が果たして行われているのだろうか。

外国人児童に対する安全教育の必要性が高まってきていることには、日本人とは違った理由も存在している。それは、外国人による犯罪の増加である。外国人犯罪は、従来はヒットアンドアウェイ方式（犯罪を目的に来日し犯行後に出国すること）が多く見られたが、最近では、日本に定住している外国人による犯罪が目立ってきている⁴⁾。この原因として、近年の経済不況に伴う生活苦の問題に加え、非行に走りやすい教育環境も指摘されている⁵⁾。このような背景のもと、外国人児童が、コミュニティ内で犯罪被害に遭うことを防ぐだけでなく、彼らが将来加害者とならないよう、中長期的視点に立った安全教育の検討が求められているのである。しかしながら、外国人児童に対する教育、とりわけ在日外国人学校で行われている教育については、本国のカリキュラムで運営されていることもあり、安全教育に限らず、実態が十分に把握されているとは言い難い。また、外国人家庭の抱える問題についても、生活状況や学習状況についての先行研究は見られるものの⁶⁾、家庭内の安全教育について言及されたものは見当たらない。

II. 研究の背景

本研究では、在日外国人学校の中から、特に在日ブラジル人学校に注目して調査を行った。この理由は、ブラジル人による犯罪は、少年犯罪の比率が高く、凶悪犯罪率は日本人の約8倍と報告されていることに加え、日本における少年犯罪の中で、ブラジル人青少年による犯罪が、外国籍少年の全保護事件の20%を超えて増加の一途をたどっているとの指摘があり⁷⁾、在日ブラジル人児童に対する安全教育の検討が急務であると考えたからである。

1990年に日本の出入国管理法が改正され、3世までの日系ブラジル人とその家族は無制限に受け入れられることとなった。その結果、多くの日系ブラジル人が出稼ぎ

目的で来日してきた。当初は、2年程度の短期の出稼ぎが中心であったが、最近では、滞在年数の長期化・定住化が進んでいる⁸⁾。家族での来日も増加しており、子どもの教育に関する関心も高まってきている。ブラジル人児童は、日本の義務教育制度が適用されないため、日本での就学義務はない。日本の小学校では、就学を希望するブラジル人児童を受け入れているが、言葉の問題やカリキュラムの違い等により学校に馴染めず、結果として不就学になる場合も多くある。本国と同じカリキュラムで運営されるブラジル教育省認可のブラジル人学校も全国に49校（平成23年1月現在）あるが、学費が高く、通学させることが難しい家庭も多くある。また、そもそもブラジル人学校は、将来ブラジルに帰国することを前提として、本国と同じカリキュラムを採用している。しかし、熊崎ら(2006)の調査で、将来日本の大学に進学させていと考えているブラジル人学校に通う児童の保護者が、15.3%いることが明らかとなった⁹⁾。しかも、この数値は、年々増加していく傾向にあるようである。したがって、本国のカリキュラムに加えて、日本に住むことを前提とした独自の教育内容の検討が求められつつあるのではないだろうか。

III. 研究目的

本研究は、日本の小学校に通う児童と在日ブラジル人学校に通う児童の安全意識や知識、行動を比較検討することにより、在日ブラジル人児童の生活習慣や学校や家庭における教育上の課題を明らかにし、彼らに対する効果的な教育プログラムを検討するための基礎資料を得ることを目的としている。

安全教育を効果的に実践するためには、知識投下型の教育だけでは不十分であり、地域や家庭と連携しながら、自らの気づきを促すような体験型の教育が求められる。最近では、多くの小学校において、「地域安全マップ学習」に代表される、新しい安全教育が実践されている。しかし、在日ブラジル人学校は、自治体や地域との連携について、日本の公立小学校に比べ遅れていると言わざるを得ない。筆者(2010)が行った、日本の公立小学校に通う外国人児童を対象とした調査の結果、在日外国人児童や保護者は、児童の安全に対して高い関心を持って取り組んでいるものの、地域連携や学校、家庭における教育に課題があり、危険な行動を取りやすく、多くの危険遭遇体験を持っているケースがあることが明らかとなった¹¹⁾。日本人児童と同じ学校へ通っている児童においても、このような差が認められるのであれば、在日外国人学校における児童は、非常に大きな課題を抱えているのではな

いだろうか。

そこで、在日外国人児童への安全教育のあり方を検討するための第一歩として、在日ブラジル人学校に通う児童を対象として、現状の把握を目的とした調査を実施することとした。本調査の目的は、筆者ら(2010)の日本人児童を対象とした同様の調査結果¹⁾と比較することにより、国籍による児童の安全意識や行動の違いを把握することにある。しかし、調査対象となった在日ブラジル人児童の数は、日本人児童数に比べて極端に少なく、両者の比較から詳細な要因が導き出せるとは考えていない。したがって、分析結果は全体の傾向の把握の理解にとどまるが、効果的な教育方法の検討や教材作成のための有効な基礎資料となるものと考えている。

IV. 調査方法

平成22年7月～10月に、ブラジル教育省認可の在日ブラジル人学校(49校 平成23年1月現在)の中から、調査協力を得られた8校の児童を対象として、安全意識や知識、行動に関する質問紙調査を実施した。調査対象校は、静岡県3校、長野県1校、愛知県1校、岐阜県1校、埼玉県1校、山梨県1校の合計8校であり、それぞれ外国人が多く居住している地域である。

実施にあたっては、事前に調査実施マニュアルを担任教師に配布し、手順を統一した。教師は質問項目を読み上げ、1問ごとに一斉回答させることとし、分かりにくい語句については、マニュアルに説明を加え、教師が口頭で補足説明をするように指示した。調査は、安全知識、外出時の行動、生活習慣、インターネットやメールの使用、留守番などに関する35問で構成されている。このうち、登下校に関する2問については、ブラジル人学校は学区がなく、スクールバスや保護者の送迎が中心であり、日本の小学校と状況が大きく異なるため、分析の対象から外している。なお、調査用紙は全てブラジル人の母国語であるポルトガル語にて作成した。ポルトガル語の調査用紙の作成にあたっては、日本語から英語、英語からポルトガル語の手順で、日本人翻訳者および2名のポルトガル語ネイティブスピーカーによる校正を行った。

有効回答の中から、日本の小学生にあたる6歳～12歳の生徒のみを今回の分析対象とし、平成21年に日本人児童を対象として行われた同内容の調査結果¹⁾との比較が

表1. 調査対象者の内訳

		1年生 (6・7 歳)	2年生 (8歳)	3年生 (9歳)	4年生 (10歳)	5年生 (11歳)	6年生 (12歳)	合計
ブラジル人 児童	男子	14	9	10	7	6	12	58
	女子	11	9	5	5	4	13	47
	不明	2	1	0	0	1	0	4
	合計	27	19	15	12	11	25	109
日本人児童	男子	1,481	1,354	1,475	1,302	1,513	1,250	8,375
	女子	1,459	1,349	1,527	1,436	1,443	1,373	8,587
	不明	2	1	2	4	4	1	14
	合計	2,942	2,704	3,004	2,742	2,960	2,624	16,976

(人)

ら、在日ブラジル人児童の安全意識や行動における特徴を明らかにすることとした。なお、今回の分析にあたっては、ブラジル人児童の調査対象者数が少ないこともあり、性別や学年による差は対象としていない。また、日本の小学校に通うブラジル人児童を対象とした同様の調査結果²⁾との比較から、学校教育の内容等が児童の安全意識や行動に与える影響について考察する。

在日ブラジル人学校における調査対象者のうち、無効回答を除いた内訳は、表1に示すとおりである。なお、本調査においては、日本の小学校データを「日本人児童」、在日ブラジル人学校データを「ブラジル人児童」と表記する。

データの集計と解析には、統計解析ソフトSPSS 19.0J for Windowsを使用した。

V. 結果

日本人児童とブラジル人児童の安全意識や知識、行動を比較するために、33問について、2群間のクロス集計をし、フィッシャーの正確確率検定を行った。検定の結果、33問のうち24問で有意な差が認められた。質問項目ごとの結果は、以下の表2～7に示すとおりである。質問項目をグループに分け、それぞれにおいて、日本人児童とブラジル人児童の特徴を検討した。なお、今回の分析については、サンプル数に大きな偏りがあることから、国籍の違いを概観することにより、今後の調査に向けた基礎資料を得ることを目的としている。そのため、有意項目の要因分析等については行っていない。

① ITに関する項目

パソコンや携帯電話の利用といった ITに関する5

1 日本人児童を対象とした調査は、全国の小学校の中から地域特性や学校規模を考慮し、教育委員会の推薦等により選定された51校で実施された

2 日本の公立小学校に通う外国人児童を対象とした調査は、静岡県浜松市において教育委員会の推薦により、外国人児童の割合が高い2校で実施された

問については、表2に示すような結果となった。5問全てで、日本人児童とブラジル人児童との間に有意な差が認められた。ブラジル人児童の方が、携帯電話の所持率が高く、インターネットやメールの利用も進んでいることが明らかとなった。また、73.1%のブラジル人児童が、インターネット使用の注意点について保護者から教えられており、家庭教育は十分に行われている様子が見えられた。しかしながら、「インターネットを使っていてトラブルに巻き込まれた経験」については、16.5%の児童がトラブル経験を有しており、日本人児童に比べて2倍以上となっている。

② 家庭に関する項目

家庭に関する項目については、表3に示すような結果となった。「おうちの人と防犯について話をする」、「出かける時に行き先を伝える」、「おうちの人の連絡方法を知っている」の3問で有意な差が認められた。この3問については、全てブラジル人児童の方が、日本人児童に比べて、高い安全意識を示している。一方で、「留守番時に電話に出てこわいと思ったことがある」児童は、日本人児童よりブラジル人児童に多くいることが明らかとなった。また、「防犯ブザーやホイッスルの所持率」については、日本人児童の57.3%が所持しているのに対し、ブラジル人児童では12.8%にとどまっている。

③ 防犯知識や行動に関する項目

防犯知識や行動に関する項目は、表4に示すような結果となった。「危険を感じた時に逃げ込む場所（こども110番の家など）を知っている」、「防犯ブザーの所持の仕方」といった安全に関する知識についての項目では、日本人児童に比べてブラジル人児童の知識が不足している様子が見えられた。安全に関する行動については、「公園のトイレに一人で行く」、「知らない人の話を聞いてみる」、「知らない人の誘いについて行く」といった項目で、日本人児童に比べてブラジル人児童が危険な行動を取っていることが明らかとなった。一方で、「急いでいる時に、遠くても明るい道を通る」、「留守番時に呼び鈴に返事をしない」といった項目では、日本人児童に比べてブラジル人児童が安全な行動を取っていた。

④ 社会ルールに関する項目

社会ルールに関する項目については、表5に示すような結果となった。この結果、ブラジル人児童の9割近くが、学校のきまりをきちんと守っていると回答しており、日本人児童に比べて、きまりを守る意識が高いことが明らかとなった。

表2. ITに関する項目

質問項目	回答選択肢	日本人	ブラジル人	正確率検定
あなたは、おうちでパソコンや携帯電話のインターネットを一人ですることはありますか	はい	31.7	63.9	p<0.01
	いいえ	68.3	36.1	
あなたは、自分用の携帯電話を持っていますか	はい	25.9	40.7	p<0.01
	いいえ	74.1	59.3	
おうち以外の人と携帯電話やパソコンでのメールのやり取りをしていますか	はい	19.3	43.9	p<0.01
	いいえ	80.7	56.1	
インターネットを使うときに注意することについておうちの人から教わったことはありますか	はい	51.1	73.1	p<0.01
	いいえ	48.9	26.9	
インターネットを使っていてトラブルに巻き込まれたことはありますか	はい	6.8	16.5	p<0.01
	いいえ	93.2	83.5	

(%)

表3. 家庭に関する項目

質問項目	回答選択肢	日本人	ブラジル人	正確率検定
おうちの人と、防犯について話をすることはありますか	はい	56.0	74.1	p<0.01
	いいえ	44.0	25.9	
出かける時に、おうちの人に行き先を伝えますか	はい	87.7	96.3	p<0.01
	いいえ	12.3	3.7	
出かける時に、おうちの人に帰る時間を伝えますか	はい	76.6	71.0	NS
	いいえ	23.4	29.0	
なにかあった時に、おうちの人と連絡を取る方法を知っていますか	はい	63.1	77.1	p<0.01
	いいえ	36.9	22.9	
一人でおうちにいる時に、電話に出ることがありますか	はい	61.5	60.4	NS
	いいえ	38.5	39.6	
一人でおうちにいる時に、電話に出てこわいと思ったことがありますか	はい	17.0	29.9	p<0.01
	いいえ	83.0	70.1	
あなたは防犯ブザーやホイッスルなど助けてくれる人をよぶためのものを持っていますか	はい	57.3	12.8	p<0.01
	いいえ	42.7	87.2	

(%)

⑤ 放課後の行動に関する項目

放課後の行動に関する項目については、表6に示すような結果となった。ほとんどの質問項目で、日本人児童とブラジル人児童の間に差は認められなかった。「駐車場子どもだけで遊んだことがあるか」についてのみ、ブラジル人児童の方が有意に高い結果となった。

⑥ 安全意識に関する項目

安全意識に関する項目については、表7に示すような結果となった。ほとんどの質問項目で、日本人児童とブラジル人児童の間に有意な差が認められた。「建物のかげや廃屋をのぞいてみたい」、「落書きのある壁やトンネルは楽しそう」といった好奇心の強さが反映しやすい項目で、ブラジル人児童が日本人児童に比べて、有意に高い値を示している。また、「顔を見たことない人が、自分の名前を呼ぶ時」については、ブラジル人児童の53.2%が、自分を知っている人だと思うと回答しており、日本人児童と大きな差が認められた。「悪い人はどんな顔をしてい

るか」については、ブラジル人児童では、こわい顔とふつうの顔と回答した児童が同数となり、日本人児童とは異なる傾向を示している。

VI. 考察

① ITについて

ブラジル人児童は、日本人児童に比べて、IT機器の利用が進んでいる。IT機器の利用については、学校教育よりも家庭での生活環境の影響が大きいのではないかと考えられる。ブラジル人家庭は共働きが多いため¹³⁾、IT機器は両親との連絡手段として有効であるだけでなく、本国の情報入手、また連絡手段として考えれば非常に便利なツールである。経済状況が好ましくないにもかかわらず、IT機器の利用率が高いことは、ブラジル人家庭におけるIT機器の必要性が非常に高いことを示している。しかし、児童が一人でインターネットやメールを使用することが、犯罪被害や加害の入り口となる可能性については、村田ら(2009)や奥村(2010)など多くの先行研究で指摘されている^{13,14)}。また、筆者ら(2011)は、携帯電話の所持が、危険行動や危険遭遇率と高い相関を示すことを指摘している¹⁵⁾。こうした危険を回避するために、学校や家庭での適切な教育・指導が必要であると言われているが、急速に進むIT機器に対して、教育内容が追い付いていないのが現状であろう。今回の調査結果において、ブラジル人児童は、日本人児童に比べてトラブルに巻き込まれた経験を多く持っていることが明らかとなった。利用率の高さが影響している可能性は否めないが、学校や家庭でのIT教育がどのように行われているのかについて、詳細に検討する必要性が感じられた。

② 家庭について

「出かける時に行き先を伝える」「おうちの人の連絡先を知っている」「おうちで防犯について話をする」といった基本的な項目において、ブラジル人児童(家庭)の安全意識が高いことが示唆された。一般的に海外諸国では、自分の安全は自分で守る意識が強く、保護者が児童の安全確保に強い役割を果たしている¹⁷⁾。学校への保護者の送迎や様々な防犯ツールの普及は、その一例である。在日ブラジル人児童の安全意識の高さも、こうした考えが影響しているものと推測できる。

「留守番時に電話に出てこわいと思ったことがある」児童は、日本人児童に比べ、ブラジル人児童に多くいる

表4. 防犯知識や行動に関する項目

質問項目	回答選択肢	日本人	ブラジル人	正確率検定
家の外で危険を感じた時に、逃げ込む場所を知っていますか	はい	73.8	43.0	p<0.01
	いいえ	26.2	57.0	
防犯ブザーを持って歩く時防犯ブザーはどこにあるかと思えますか	かばんの中	5.0	44.0	p<0.01
	かばんの外	95.0	56.0	
ガードレールのある道を通る時、どうしますか	ガードレールの外側を歩く	15.0	12.1	NS
	ガードレールの内側を歩く	85.0	87.9	
公園で友達を遊んでいる時、トイレに行きたくなったらどうしますか	一人で行く	49.8	60.2	p<0.01
	友達を誘って行く	50.2	39.8	
急いでいる時に、暗くても近い道があれば、どうしますか	暗くても近い道を通る	21.2	12.8	p<0.01
	遠くても明るい道を通る	78.8	87.2	
外であなたが一人にいる時に、知らない人が話しかけてきたらあなたはどうしますか	話を聞いてみる	14.4	25.9	p<0.01
	知らんぷりをする	85.6	74.1	
知らない人が「お菓子やおもちゃをあげるからついておいで」といいました。あなたはどうしますか	ついていく	1.3	7.3	p<0.01
	ついていかない	98.7	92.7	
知らない人に「お母さんに頼まれたから車に乗りなさい」といわれたら、どうしますか	車に乗る	2.7	5.5	NS
	車に乗らない	97.3	94.5	
一人でおうちに帰ってきた時、いつものようにしておうちの中に入っていますか	まわりを確かめてから入る	47.0	49.5	NS
	すぐにおうちの中に入る	53.0	50.5	
一人でおうちにいる時、呼び鈴が鳴って、誰かがやってきましたら、あなたはどうしますか	返事をする	38.7	13.9	p<0.01
	返事をしない	61.3	86.1	

(%)

表5. 社会ルールに関する項目

質問項目	回答選択肢	日本人	ブラジル人	正確率検定
近所の人にあいさつをしていますか	はい	85.7	78.9	NS
	いいえ	14.3	21.1	
学校で決められているきまりをきちんと守っていますか	はい	77.0	89.8	p<0.01
	いいえ	23.0	10.2	

(%)

表6. 放課後の行動に関する項目

質問項目	回答選択肢	日本人	ブラジル人	正確率検定
一人で外で遊ぶことがありますか	はい	36.1	43.9	NS
	いいえ	63.9	56.1	
夜8時よりおそくに、一人でおうちの外にいたことはありますか	はい	16.0	19.3	NS
	いいえ	84.0	80.7	
一人の時や子どもだけでいる時に、こわい人に声をかけられたことがありますか	はい	15.7	14.7	NS
	いいえ	84.3	85.3	
駐車場で子どもだけで遊んだことはありますか	はい	36.6	46.8	p<0.01
	いいえ	63.4	53.2	

(%)

ことが明らかとなった。「留守番時に電話に出る」児童の割合に大きな差がないことを考慮すれば、ブラジル人家庭に児童がこわいと感じる電話が、日本人家庭以上にかかってきていることを示している。ただし、この結果は、ブラジル人学校に通学している児童の多くが、日本語の

理解が不十分であることが影響している可能性も否定できない。

防犯ブザーやホイッスルの所持については、日本人児童とブラジル人児童に大きな差が認められている。多くの日本の小学校では、入学時に防犯ブザーやホイッスルを無償配布しているため、高い所持率となっていることは容易に推測できる。逆に、ブラジル人児童の所持率の低さは、機器に対する理解の問題だけでなく、無償配布の対象から外れている自治体が多くあることを示唆している。今回の調査対象校においても、防犯ブザーやホイッスルを配布している学校は認められなかった。防犯ブザーやホイッスルの所持は、安全意識の高さや安全な行動選択と高い相関があることが指摘されており¹⁵⁾、これらを所持し続けることは、家庭や児童の安全意識の高さを示す項目と考えることができる。ブラジル人児童にとって、携帯電話が防犯ブザーに代わるツールとなっている可能性もあるが、前述の通り、携帯電話の所持は危険行動や危険遭遇率との相関が高く注意が必要である。ブラジル人学校へのヒアリングでは、ブラジル本国では、防犯ブザーやホイッスルは日本ほど普及していないと回答していた。ブラジルでは、盗難被害が非常に多いため、防犯ブザーは車両や自宅の盗難に対して設置するものであるとの認識であった。こうした両国の認識差も、所持率に影響を与えている一因ではないかと考えられる。今後は、両国の文化的背景を考慮しながら、ブラジル人学校や家庭に対して、防犯ブザーやホイッスルの有効性について啓発して必要性が感じられた。

③ 防犯知識や行動について

ブラジル人児童は、日本人児童に比べて、安全に対する知識が不足している様子が示唆された。日本人児童に広く普及している「いかのおすし³⁾」の様な標語については、日本語の言葉そのものを覚える必要はなく、内容を理解していれば十分である。しかし、「こども110番の家」のような、危険時に逃げ込む場所等、両国の文化的な違いはあるにせよ、日本で居住している以上、知っておくべき事項も多くある。相互理解を深め、児童の安全を、どのように協力し合いながら確保していくのかについて具体的検討が求められる。ブラジル人学校においても、日本語で書かれたステッカー等の読解の問題等、安

3 「いかのおすし」とは、警視庁が考案した防犯標語であり、「いか…知らない人についていかない」「の…他人の車にのらない」「お…おごえを出す」「す…すぐ逃げる」「し…何かあったらすぐ知らせる」の5つの約束をまとめたものである

表 7. 安全意識に関する項目

質問項目	回答選択肢	日本人	ブラジル人	正確率検定
こわい人が近づいてきたら「助けて！」と、大きな声でさげますか	はい	79.8	87.2	NS
	いいえ	20.2	12.8	
隠れやすい建物のかげや、誰も住んでいないおうちを見つけた時、あなたはどうしますか	のぞいてみる	10.6	22.0	p<0.01
	そのまま通り過ぎる	89.4	78.0	
顔を見たことがない人が、急にあなたの名前を呼びました。その人はどういう人だと思いますか	あなたを知っている人だと思う	28.0	53.2	p<0.01
	あなたを知らない人だと思う	72.0	46.8	
おうちの外で落書きがたくさんしてある壁や塀、トンネルなどを見たら、どのように思いますか	楽しそうな気がする	3.2	12.1	p<0.01
	こわい気がする	52.0	35.5	
	なにも思わない	44.9	52.3	
悪い人はどんな顔をしていると思いますか	やさしい顔	25.5	19.3	p<0.01
	こわい顔	45.6	40.4	
	ふつうの顔	28.9	40.4	

(%)

全教育内容の再点検が必要である。防犯ブザーの所持方法の理解については、所持率の低さが影響しているものと考えられるため、まずは防犯ブザーやホイッスルを所持させることが先決である。その他、ブラジル人児童の中に、重大な犯罪につながりやすい声かけ時の対応について、危険な行動を取る児童が一定数いることが明らかとなった。濱田(2008)は、ブラジル人児童は、自己の能力に対して、きわめて強い肯定感を持っていると指摘している¹⁶⁾。危険遭遇時にも、「自分で判断して逃げることができる」と考えている児童も多くいるのではないだろうか。しかし、児童の連れ去りの手口は、騙し・甘言だけでなく、力づくで連れ去るケースも多々ある。最初の接触を避けることが最も有効な対処方法であることを、日本人児童以上に理解させることが求められる。

④ 社会ルールについて

ブラジル人児童は、日本人児童に比べて、きまりを守る意識が高いことが明らかとなった。安全に関するきまりを守って生活することは、安全確保の上で非常に有効である。この結果から、ブラジル人児童に様々な安全に関するきまりを教えることで、安全に行動できるようになる可能性が示唆された。

⑤ 放課後の行動について

放課後の行動については、日本人児童とブラジル人児童の間に大きな差は認められなかった。外国人の集住地区では、言語や生活習慣の相違等により日常生活上のトラブルが発生しやすくなるとともに外国人が地域の安全に関する情報を入手し難い状況がみられる。また、このような状況下で、外国人が犯罪や事故に巻き込まれるだけでなく、国際犯罪組織等が外国人集住コミュニティに浸透し、外国人が犯罪に手を染める恐れが指摘されている¹⁸⁾。このように外国人コミュニティに危険因子が多く

存在していることはよく指摘されているが、今回の調査結果からは、声かけの経験といった危険遭遇体験についての差は認められていない。濱田(2008)は、ブラジル人児童の放課後の行動について、友達と遊ぶことが少なく、家に一人でいることが多いと指摘している¹⁶⁾。こうした児童の実態を踏まえると、危険遭遇体験が日本人児童と同レベルであるからといって、問題がないとは言い切れない。駐車場で遊んだことがあるかどうかについては、日本人児童との間に有意な差が認められた。駐車場で遊ぶことは、交通事故の危険性が高まるだけでなく、連れ去りを容易にする場合があることが指摘されており¹⁷⁾、十分注意を払うように教育していく必要性がある。

⑥ 安全意識について

安全意識については、日本人児童とブラジル人児童の間に多くの差が認められた。ブラジル人児童は、日本人児童に比べて、「建物のかけやだれも住んでいない住居をのぞいてみたい」「落書きのある壁や塀、トンネルを見て楽しそう」と回答する児童が多くみられた。これらの場所は、犯罪機会論⁴では、危険に遭遇する可能性の高い場所として避けるように指摘している。この結果から、ブラジル人児童が、こうした犯罪機会論に基づく危険箇所の理解が不十分である可能性が示唆された。また、連れ去りの手口の一例として、声かけの際に、名前を事前に調べて呼ぶことはよく知られている。今回の調査結果では、ブラジル人児童は日本人児童に比べて、声をかけてきた人を知り合いだと思ってしまう傾向があることが明らかとなった。一方で、悪い人が必ずしもこわい顔をしているわけではないということについては、日本人児童よりブラジル人児童の方が理解している。これらの結果からは、日本人児童とブラジル人児童のどちらの安全意識が高いのかを判断することは難しく、今後、安全に関する知識の習得状況と併せて検討していく必要性が感じられた。

⑦ 日本の公立小学校に通うブラジル人児童との比較

筆者(2010)は、日本の公立小学校に通うブラジル人児童を対象とした安全に関する調査の結果、以下のように児童の特徴を指摘している¹¹⁾。

- ・IT機器の利用率が高い
- ・安全意識が高い
- ・防犯ブザー所持率が高い

- ・安全に関する知識不足（防犯ブザーの所持方法や「こども110番の家」など）
- ・危険遭遇体験が多い
- ・危険な行動選択と好奇心が強い

この結果と、今回の調査結果を比較して、児童の安全意識や行動が、ブラジル人児童特有のものなのか、学校教育活動の結果なのかを推測してみたい。公立小学校に通うブラジル人児童とブラジル人学校に通う児童の結果を比較すると、多くの項目において似通った結果となっている。この結果から推測すると、「IT機器の利用率が高いこと」「高い安全意識を持っているが、必要な安全知識が不足している点が見られること」「好奇心が強く時に危険な行動を選択していること」は、ブラジル人児童や家庭、コミュニティの特徴と言えるのではないかと。一方で、防犯ブザーやホイッスルの所持については、全く異なる結果となった。日本の公立小学校に通うブラジル人児童は、日本人児童に比べて、防犯ブザーやホイッスルの所持率が高かった。しかし、ブラジル人学校における所持率は、日本人児童に比べて大変低くなっている。これは、防犯ブザーやホイッスルに対する意識の差ではなく、学校での教育や施策等の問題であることを示唆しているのではないだろうか。

また、両者の家庭の日本滞在に対する意識の差も考慮すべきである。ブラジル人学校に通う児童の家庭は、近い将来の帰国を希望し、帰国後の教育のためにブラジル人学校へ通学させていると考えられる。しかし、現実には、帰国がかなわず長期滞在となっている家庭が多くみられる。この場合、子どもたちは日本に滞在しているものの日本語の理解が不十分であり、将来的に日本での進学や就職を望んでも叶えられない可能性が高い。イシカワ(2007)は、このような家庭は、日本の滞在計画がはっきりとしないため子どもの教育方針に一貫性を欠き、教育への配慮が疎かになり、場合によっては無関心にさえなっていると指摘している²²⁾。こうした家庭環境が、児童の安全意識や行動に影響を与えていることも検討する必要があるのではないだろうか。

2つの調査結果の比較から、同じコミュニティに住んでいるブラジル人家庭であっても、学校教育や家庭教育の影響により、児童の安全行動に差が出るのが推測された。今後は、ブラジル人児童特有の問題とブラジル人学校における問題を整理し、必要な教育や教材について検討することが求められる。

4 犯罪機会論とは、犯罪者に注目し、犯罪の原因を追及することで、今後の犯罪防止を目指す従来からの「犯罪原因論」に対し、どんなに罪を犯す原因を持っている人であっても、犯罪の機会がなければ実行できないとし、犯罪の起りやすい場所を特定することにより犯罪防止を目指す考え方

Ⅶ. まとめ

在日ブラジル人学校児童を対象とした調査の結果、多くのブラジル人家庭が、児童の安全に対して、関心を持って取り組んでいる様子がうかがえた。しかし一方では、日本特有の安全に関する知識や取り組みに対する理解、インターネットや携帯電話といったIT機器に関する教育については、十分とは言い難い現状も明らかとなった。その他、防犯ブザーの配布といった、ブラジル人学校に対する地域や自治体の施策にも課題があることが指摘された。また、日本への滞在計画に伴う日本語理解の問題など、ブラジル人学校に通学する児童の家庭特有の問題が影響を与えている可能性も考えられる。

最近では、在日ブラジル人児童を対象とした安全教育の機会を、自治体や警察が設けている例も見られるようになってきている。しかし、多くは日本人を対象としたものをそのままブラジル人に当てはめているだけであり、在日ブラジル人児童の現状を理解し、彼らに必要な教育を提供している例は少ない。日本社会で生活するうえで欠くことのできない力の習得をブラジル人としてのアイデンティティを尊重しながら進めていくことが強く求められる。今回の調査結果を参考として、今後、在日ブラジル人児童に対して適切な安全教育が実施されることを期待したい。

謝辞

本研究を行うにあたり、在日ブラジル人学校関係者の皆様に、多大なるご協力を賜った。ここに記して深謝する。なお、本研究は、科学研究費補助金（若手研究B 課題番号:21700678）「在日外国人児童に対する安全教育の実態と児童の安全意識の構造解析」の一環として実施されたものである。

文献

- 1) Kimiya T, Sakata M, Tatsumoto Y, et al. Safe Behavior Awareness Survey for Primary School Children, The First Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education, 2009 : 483
- 2) 堀清和, 長谷川ちゆ子, 中菌伸二ほか. 児童の安全に対する「気づき」について, 第10回日本安全教育学会予稿集, 2009: 34-35
- 3) 小宮信夫. 子どもを犯罪からどう守るか～犯罪機会論と地域安全マップ, 警察政策, 2007 ; 9 : 41-60
- 4) 警察庁. 平成22年度警察白書.
at : <http://www.npa.go.jp/hakusyo/h22/index.html>
- 5) 警察庁. 平成18年度警察白書.
at : <http://www.npa.go.jp/hakusyo/h18/index.html>
- 6) リリアンテルミハタノ. 在日ブラジル人児童の教育から見る日本社会の多民族化状況, 立命館言語文化研究, 2006;17(3): 195-208
- 7) 小林利郎. 在日日系ブラジル人子弟の教育問題, 日本ブラジル中央協会ブラジル特報, 2004. 3
- 8) 梶田孝道, 丹野清人, 樋口直人. 顔の見えない定住化～日系ブラジル人と国家・市場・ネットワーク, 三重大学人文学部文化学科学研究紀要, 2006 ; 23 : 169-177
- 9) 熊崎さとみ, 天野弥生. 長野県在住ブラジル人児童生徒の教育問題, 信州大学留学生学生センター紀要, 2006 ; 7 : 83-94
- 10) 坂中英徳. 移民開国に向かう日本, the magazine of the European Business Council in Japan, 2010. 1
- 11) 木宮敬信, 在日外国人児童と日本人児童の安全意識の比較研究, 浜松大学研究論集, 2010 ; 23(1) : 23-29
- 12) 木宮敬信, 堀清和, 辰本頼弘ほか. 小学生を対象とした安全に関する調査の分析, 安全教育学研究, 2010 ; 10(1) : 47-55
- 13) イシカワ・エウニセ・アケミ. ブラジル人の日本滞在長期化にともなう諸問題, ラテンアメリカ・カリブ研究, 2003 ; 10 : 11-20
- 14) 村田育也, 鈴木菜穂子. 携帯電話を使用するために必要な未成年者の責任能力について～未成年者が関わった出会い系サイト関連事件の新聞報道を基にして, 日本教育工学会論文誌, 2009 ; 32(4) : 435-442
- 15) 奥村徹. 携帯関連事件の犯人は何をしているか (情報モラル指導と小中学生の携帯電話 子どもとケータイの現状), 学習情報研究, 2010 ; 217 : 14-17
- 16) 木宮敬信, 阪田真己子, 中菌伸二ほか. 携帯電話および防犯ブザーの所持が児童の安全能力に与える影響, 学校危機とメンタルケア, 2011 ; 3 : 44-55
- 17) 中村攻. 子どもはどこで犯罪にあっているか, 晶文社, 2006
- 18) 森英樹編. 現代憲法における安全, 日本評論社, 2009
- 19) 警察庁, 平成22年版警察白書, ぎょうせい, 2010 : 25
- 20) 濱田国佑. ブラジル人学校の児童・生徒と保護者の意識, 「調査と社会理論」研究報告書, 2008 ; 25 : 137-158
- 21) 木宮敬信, 中菌伸二, 長谷川ちゆ子ほか. 児童の安全意識と行動に影響を及ぼす要因とは, 第18回日本健康教育学会予稿集, 2009 : 123
- 22) 宮島喬, 太田晴雄編. 外国人の子どもと日本の教育, 東京大学出版社, 2007